

がある。これまでの生活習慣を改めることを求められると、否が応にも、こうした自分のおかれた現実に向き合わされることになる。これまでの自分の生活習慣を変えざるをえない状況、そしてそれを医療従事者に患者が当然なすべきことであるかのように求められる体験は、どれほどの苦痛を伴うものであろうか。

日々の生活を
評価されるス
トレス

自分自身を否
定される体験

維持透析患者は、透析室に入ってまず体重測定をする。その日の体重の増減により透析治療の方針が決められる。この定期的な体重測定が、透析患者にとっては日々の生活を評価されるようなストレス体験になっていることが多々ある。ある患者は、「今日は怒られないか、つつい食べすぎたけど大丈夫かなどとテストを受けているようで毎回、体重計に乗るのはドキドキなのよ」と言う。また、血圧測定、血液検査や心電図測定も、生活を評価される体験であり、結果が悪いと、自分の食生活を含む生活態度が悪いと決められ、ひいては自分自身を否定される体験となることがある。彼らは、自分がダメだと思い込み、自信をなくし、先の見えない透析治療に不安を抱き、時には抑うつ的となり、死を意識することもあるという。さらに、腎不全のために身体障害者手帳をもつことになり、透析治療のために高額な医療費の補助を受け続けている。これらの透析治療を受けていくために必要な検査や社

ワンポイント アドバイス



あえて慢性疾患患者と長期透析患者を分類した場合、喪失感を主とする心身への影響の違いを教えてください

長期透析患者は、長期であるがゆえにシャントトラブルや合併症などの身体的問題を抱えることが多くなります。彼らは、いったんは透析を受けて回復した身体がまた思いどおりにならないものになるという喪失感を幾度となく繰り返し体験します。慢性疾患患者は、原疾患とその後に続く進行による喪失感が繰り返されますが、透析患者は腎不全という疾患から進行するというより、透析治療の継続的負荷に由来する身体的問題に悩まされることが大きな違いと考えています。

透析患者は、透析治療を受けなければすぐに死を意味するという厳しい状況にあり、喪失感をより強く感じる機会が慢性疾患患者よりも多いと思われます。また、透析器械により生かされている生命という、自分ではどうにもできない無力感を受け入れざるをえないことにも強い喪失感を抱くようです。

がんなどの慢性疾患患者では集中した治療期間があり、病気となった自分の人生に新たな意味を見出し、前向きに生きていく人がいます。長期透析患者のなかには、一般に外来通院のみで、移植以外では生涯続く血液透析を受けながら、変化する身体状況に自分の生き方を適応させ、自律的な生活を送るなかで生きる意味を問い直し、その都度、新たな価値や意味を発見し、成長、発達をする人がいます。(服巻 豊)